

# SHOW HEY シネマールーム

★★★★★

## リスボンに誘われて

2012年・ドイツ、スイス、ポルトガル映画  
配給/キノフィルムズ・111分

2014 (平成26) 年9月20日鑑賞

シネ・リーブル梅田

### Data

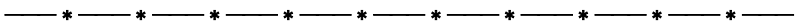
監督：ビレ・アウグスト  
脚本：グレッグ・ラター、ウルリッヒ・ハーマン  
原作：パスカル・メルシエ『リスボンへの夜行列車』（早川書房刊）  
出演：ジェレミー・アイアンズ/メラニー・ロラン/ジャック・ヒューストン/マルティナ・ゲデック/マルコ・ダルメイダ/トム・コートネイ/アウグスト・ディール

## 👁️👁️ みどころ

情報量の少ない原作や映画にも掘り出しものが！その典型が本作だ。『リスボンへの夜行列車』というタイトルだけで「旅情」と「叙情」はすぐわかるが、本作のその他のポイントとなる「激情」とは？そして「慕情」とは？

偶然入手した100冊限定本『言葉の金細工師』に魅かれて、リスボンへ旅立った初老の教師がそこで得たものとは？

1974年4月25日はポルトガルの革命記念日。その日まで続いたサラザール独裁政権へのレジスタンス運動はどのように展開されたの？そんなこともしっかりと勉強しながら、この貴重な旅行記を噛みしめたい。



## ■□■日本では情報量の少ない、こんなベストセラーに注目！■□■

日本では新聞、TVを通して小説や映画の情報が溢れかえっているが、ドイツで04年出版されて200万部のベストセラーとなり、世界31か国で刊行された、全世界累計販売部数は400万部を超える、というパスカル・メルシエ原作の『リスボンへの夜行列車』（早川書房刊）を知っている人は少ないのでは？

私は毎朝、新聞5紙を読み、日曜日には各紙が特集している新刊書紹介にも目を通して、それでも同書のことは知らなかった。予告編を何度か観て、「これは良さそうだな」と思ったが、本作を必見！と思ったのは、9月12日付日本経済新聞夕刊の①「映画レビュー」における映画評論家・村山匡一郎氏の記事、②「シネマ万華鏡」におけるエッセイスト武部好伸氏の記事、さらに③『キネマ旬報』10月上旬号（レビュー）を読んだため。①では星4つ、②では星5つ、③では3人の評論家が星5つ、3つ、4つ、と高く評価し

ていた。1948年デンマーク生まれのビレ・アウグスト監督は有名らしいが、残念ながら私の記憶にはない。また、本作のパンフレットには、きさらぎ尚氏が「理想の配役による絶品のアンサンブル」というタイトルで俳優紹介をしているが、私がハッキリ認識できるのは、クエンティン・タランティーノ監督の『イングリシアス・バスターズ』（09年）への登場ですぐに覚えてしまったフランスの美人女優メラニー・ロランくらい（『シネマルーム23』17頁参照）。そんな「地味な」映画だが、日本では情報量の少ないこんなベストセラーにも注目！ そうしなければ、こんないい映画を見逃してしまうことにも・・・。

## ■□ポルトガルの独裁政権とは？■□

近時「イスラム国」へのアメリカそして「有志連合」による空爆問題が注目を集めているが、「イスラム国」なんて一体いつできたの？ これは勝手にそう名乗っているだけで、ホントの国家ではないことは、新聞を読んでいればわかる。しかし、世界情勢の動きは急だし、収集すべき情報は多すぎるから、私の頭はなかなかついていけない。そういえば、つい少し前の2011年4月にはポルトガルの財政破綻問題が世界の注目を集め、結局EU（欧州連合）から緊急金融支援を受けることになったが、その後、そして現在はどうなっているの？ それはネットで情報を調べればすぐにわかるが、そこまで興味をもってポルトガルの財政破綻問題を見ている人は少ないはずだ。歴史上の知識としてスペインのフランコ独裁政権の問題については、私を含めた日本人は比較的好く知っているが、それは多分、ヘミングウェイの小説『誰がために鐘は鳴る』やゲーリー・クーパーとイングリッド・バーグマンが共演した同名映画（43年）のためだ。

しかして、本作を観て私がはじめて知ったのは、ポルトガルでは1926年から1974年4月25日までアントニオ・デ・オリベイラ・サラザールの独裁政権が続いていたという歴史的事実。1974年といえば、私が弁護士登録をした年だ。ポルトガルの「4月25日革命」の日、そして「カーネーション革命」とも「自由の日」とも呼ばれる祝日となっているその日、1974年4月25日に、私はピカピカの弁護士パッチを付けて何度目かの法廷に立っていたことをつい昨日のこのように覚えている。

本作の主人公ライムント・グレゴリウス（ジェレミー・アイアンズ）は初老の男だが、彼のリスボンへの旅の中で回想されていくレジスタンス闘争の物語の主人公は、若き医師アマデウ・デ・プラド（ジャック・ヒューストン）。そのアマデウは「革命の日」に死亡したらしいが、それは一体なぜ？ また、スイスのベルンに住み、高校生たちに古典文献学を教えているライムントがなぜポルトガルのリスボンへ？

## ■□リスボンのまちに注目！■□

東京は2020年開催のオリンピックに向けて更なる大改造、超高層化への道を歩み始めているが、本作にみるリスボンのまちは路面電車が走り、石畳の坂道が多い風情のある

まちだ。ライムントが泊まるホテルも、昔の日本旅館のような小さな個人経営のもので、玄関前の道路もかなり変形だ。もっとも、本作を観ただけではポルトガルの首都リスボンのまちの詳細はわからない。

『キネマ旬報』10月上旬号で平田裕介氏は、いみじくも「旅情、叙情、慕情に激情」と書いているが、その旅情と叙情はリスボンのまちを表現したものだ。

スクリーンを覗いているだけでもリスボンのまちの風情は十分感じ取ることができるが、更にその詳細を知りたいければ、パンフレットにある岡田カーヤ氏の「ただたださまよいつけたくなる、白い街、リスボン」を読めばよい。私はヨーロッパ旅行は1度だけで、ポルトガルのリスボンには行ったことがないが、本作をイメージし、このガイド本(?)を読みながら、リスボンのまちを観光すればさぞ楽しいことだろう。老後(?)の楽しみの1つとして、それを是非頭の片隅に置いておきたい。

ちなみに、鞆削(コン・リー)が主演した『たまゆらの女(ひと)』(03年)の原作は、ペン・ネーム「北村(ペイ・ツン)」の名で知られる作家が書いた『周漁的喊叫』(『チョウ・ユウの汽車』)という短編小説(日本未訳)。そして、同作は陳清(チェン・チン)の詩に魅かれたコン・リー演ずる周漁(チョウ・ユウ)の、雲南省の昆明から四川省の重慶まで、「火車」で片道10時間の長距離恋愛を描いたものだった(『シネマルーム5』245頁参照)。しかして、スイスのベルンからポルトガルのリスボンまでは、夜行列車で何時間かかるの？

## ■□■リスボンへの旅は、こんな「偶然」から!■□■

小説も映画も所詮「つくりもの」だから、そこには「偶然」がたくさん詰め込まれているのが普通。そして、パスカル・メルシエの原作『リスボンへの夜行列車』はその「偶然」がテンコ盛りだ。そうなると、現実味がなくなり、バカバカしくなってくる危険性があるが、本作はその「偶然」がミステリー色豊かに配置されているためか全く違和感がなく、逆にストーリーの中に引きずり込まれていく感が強い。

最初の偶然は、ライムントが橋の上から今にも川の中に飛び込み自殺をしようとしている若い女性を救うこと。もっとも、ライムントがあえて教室に座らせたその女性はライムントが授業を行っている間に再び出て行ってしまうのだが、彼女が残した赤いコートのポケットの中から『言葉の金細工師』という本と、リスボン行き夜行列車のチケットを入手したのが最初の偶然。それが『リスボンへの夜行列車』と名付けられた原作や本作の、最初のポイントだ。もっとも、本をロクロク読まない今ドキの若者が、この『言葉の金細工師』を手にしても何の興味も示さないだろうが、ライムントは古典文献学を教えているだけに、本の中に写真も載っている若者アマデウが、その本の中に紡いだ言葉の数々が思索に富んだものだったから、たちまち興味を示していくことに……。ライムントが急いで夜行列車の出発時刻に間に合うよう駅のホームに向かったのは、その夜行列車に乗るためではなく、教室から出て行ってしまった若い女性がそこに現れることを期待し、彼女にそ

のチケットを渡すためだったはず。ところが、彼女の姿が見えない中、ライムントのような思慮深い初老の男でも、なぜか衝動的にその列車の中に乗り込んでしまうことに・・・。

私は学生時代の夏休みに、故郷の△△へ帰るガールフレンドを港まで見送りに行った際、そのままの勢いで一緒に船に乗り込み、「△△への旅」をしたことがあったが、これはきっと「△△に誘われた」ためだ。この時には「若さの勢い」というものがあったが、ライムントのような初老の男が「リスボンに誘われて」として「リスボンへの夜行列車」に乗り込んだのは、きっと偶然手にした『言葉の金細工師』という本の中に紡がれた言葉の魅力のためだったのだろう。

## ■□■『言葉の金細工師』は100冊限定！■□■

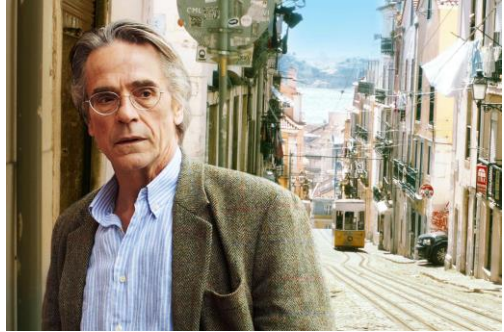
出版不況が叫ばれて久しい中でも、自費出版、協力出版、さらに電子書籍出版の話は多い。私の『SHOW-HEYシネマルーム』の出版は2002年6月の1冊目以降、今日まで12年間で32冊まで続いているが、その発行数はすべて3000部だ。しかし、ライムントがスイスのベルンから夜行列車に乗ってポルトガルのリスボンにある著者アマデウの家を訪れ、アマデウの妹だというアドリアーナ（シャーロット・ランプリング）から聞いた話によると、『言葉の金細工師』の出版はたった100冊だけというから驚きだ。

本作のパンフレットには、冒頭に川本三郎氏の「埋もれた青春への旅」というコラムがあり、そこでは「『この本には自分がずっと考えていたことがすべて書かれている』。小さな本は小説というよりリルケの『マルテの手記』のような思索ノートだろう。」と書かれているが、そのことは発行部数の少なさからも明らかだ。アマデウの家にはこの本は現在6冊しか残っていないそうだが、なぜリスボンで出版されたたった100冊だけのアマデウの「思索ノート」ともいべきこの本が、スイスのベルンであの若い女性のコートの中に入っていたの？

アドリアーナは『言葉の金細工師』に興味をもって訪れてくれたライムントを歓迎してくれたが、アマデウは留守だというばかりで彼の現在、過去については全く語ってくれない。そのため、そこからリスボンでのライムントの素人探偵のようなアマデウをたどる旅が始まるわけだ。ライムントが老家政婦から聞いたプラゼーレス墓地に行ってみると、そこには1940年に生まれ、1974年4月25日に死去したアマデウの立派なお墓があった。なぜアドリアーナはアマデウが死亡していることをライムントにハッキリ言わなかったの？また、アマデウはなぜポルトガルの革命記念日たる1974年4月25日に死んでしまったの？さらに、お墓に刻まれている「圧制が事実なら、革命は義務だ」との文字は一体何を意味するの？そんな疑問を持ちつつ、リスボンでのライムントのアマデウを訪ねる旅は、これにてジ・エンドになるはずだったが・・・。

## ■□■第2の偶然は？生き残りのレジスタンス闘士は？■□■

ライムントは妻と離婚して5年余りになるそうだが、よほど女性との偶然の出会いに恵まれているらしい。冒頭の若い女性との出会いが第1の偶然なら、第2の偶然は自転車との衝突事故によって眼鏡を割り、怪我をしてしまったライムントが女医のマリアナ（マルティナ・ゲデック）の治療を受け、眼鏡を新調してもらった際に、偶然アマデウに連なるマリアナの伯父ジョアン（トム・コートネイ）を紹介してもらったことだ。この偶然もできすぎていると言わざるをえないが、練られた脚本で、名優たちの名演技の中で展開されると、そういうイチャモン付けは引っ込んでしまう。



(c) 2012 Studio Hamburg FilmProduktion GmbH / C-Films AG / C-Films Deutschland GmbH / Cinemate SA. All Rights Reserved. 全国順次ロードショー

ナチス・ドイツに対するフランスでのレジスタンス、フランコ政権に対するスペインでのレジスタンス、さらには日本の軍国主義が進む中での日本共産党を中心とする抵抗運動とその弾圧の姿はよく映画に描かれる。また、9月11日に観た『シュトルム・ウント・ドランクッ』（13年）は、1923年に発生した関東大震災の中で虐殺された大杉栄の物語を核とした、若きアナキストたちのかなり変わった青春群像劇だった。しかして、本作で描かれる、ポルトガルのサラザール独裁政権に抵抗する若き4人の闘士たちのレジスタンス活動とは？若き4人の闘士は、①労働者階級出身のジョルジュ（アウグスト・ディール）、②その恋人で、同志の名前その他のデータをすべて記憶しているという女性エステファニア（メラニー・ロラン）、③今は介護施設に入っている若き日のジョアン（マルコ・ダルメイダ）、そして、④裁判官を父に持つ上流階級の息子で医師、本来なら支配階級の立場に立っているはずのアマデウ、の4人だ。

今、ライムントが入れてやった紅茶を飲もうとするジョアンのカップはガタガタと揺れていた。それはジョアンの両手の指がほとんど動かなくなっているためだが、それはなぜ？独裁政権に対する抵抗運動には、逮捕、拷問の危険が付きまとうのが常だが、ピアノを弾くのが得意だったジョアンの指が潰されてしまったのは、一体なぜ？

## ■□■レジスタンス運動の中で生まれた三角関係とは？■□■

軍国主義時代の日本に「治安維持法」という悪法があったこと、その中で「特高警察」が幅を利かせていたことは有名だが、サラザール独裁政権時代のポルトガルには政治警察 P I D E（国防国際警察）が幅を利かせていたらしい。父親と同じ裁判官への道を進まざり理想に燃える医師として社会人生活をスタートさせたアマデウはある日、民衆から袋叩きに遭って瀕死の状態にある P I D E の幹部レイ・ルイス・メンデス（アドリアーノ・ルー

ス)の命を救ったが、それは医師としての使命にもとづく行動だった。しかし、それによって以降アマデウの人生はいかなる影響を？

共にレジスタンス運動に関わりながら、労働者階級ではないアマデウには「どこか甘いところがあった」というのが、労働者階級出身でバリバリの闘士であり、親友・ジョルジェの評価だったが、さてアマデウのレジスタンス活動の貢献度は？さらに、いくらレジスタンス闘争といっても、若い男女が入り乱れてやっていることだから、そこに恋愛感情が絡んでくるのは当然。それは、私の1960年代後半の学生運動の体験からも明らかだ。その上、ジョルジェの彼女であるエステファニアは絶世の美女。さらに3人のアジトにはじめて入り込んだアマデウは頭のいいだけでなく、ハンサムさにおいてもジョルジェよりはるかに上だ。そんな中で必然的に生まれた恋の葛藤、つまり「三角関係」の行方は？

57歳の初老の男ライムントが旅先のリスボンで1970年代にさかのぼって訪ねていく4人の若きレジスタンス闘士たちの青春群像劇は、『シュトルム・ウント・ドランクッ』よりは遙かに緊迫感をもって私たちの目の中に入ってくる。

## ■□■キーウーマンの生死は？年老いた女闘士は誰が？■□■

介護施設の中でひっそり過ごしていたジョアンも、今では時々隠れてタバコを持ってきてくれるライムントと仲良くなり、アマデウについての情報を次々と提供してくれていた。他方、ライムントは今でも薬局を経営しているジョルジェからもアマデウの情報を得ようと考えたが、ジョルジェは断固それを拒否。それは一体なぜ？それはきっと、共にレジスタンスの闘士として同志関係にあったジョルジェとアマデウがエステファニアをめぐる恋愛関係にあったことと、P I D Eの手入れが入る中、すべての情報を記憶しているエステファニアの存在が危険なため、エステファニアを消すべきだと考えたため、ジョルジェはその葛藤に苦しんでいたためだ。

本作は2つの時代を交互にスクリーン上で展開させていくから少し複雑だが、ちゃんと観ていればストーリーは十分理解できる。しかし、P I D Eの追及から逃れる中、一緒にアマデウの家に逃げ込んだアマデウとエステファニアを見つめるアマデウの妹アドリアーナ、そして銃を持って2人を追い、アマデウの家に入り込んできたジョルジェの切羽詰まった表情を見ていると、次第にミステリー色も濃くなってくる。結局、アマデウとエステファニアはリスボンから車で遠くへ逃げるのだが、P I D Eの検問に合い、危険にさらされる中、アマデウを助けてくれたのは、とっさにアマデウが「ここに連絡しろ」と言いながら出したメンデスの名刺。医師としてのアマデウによって命を助けられたメンデスは、その時の借りをここで返さざるをえなかったわけだ。

そんなストーリーはそれなりに手に汗を握るものとして見せてくれるうえ、後半には本作のキーウーマンであるエステファニアが生きていたことが明らかになる。ここでの注目点は、私が絶世の美女と表現しているメラニー・ロランが演じている若き日のエステファニア

アの、年老いたエステファニアを誰が演じるのか？ということ。それを演じるのはスウェーデン生まれのレナ・オリンという女優だが、これがいかにもピッタリだ。オードリー・ヘップバーンや浅丘ルリ子は若き日の姿と年老いた姿が大違い。それに対して、あまり変わらないのが吉永小百合や黒木瞳、そして私の大好きな秋吉久美子などだ。本作では、ストーリー展開とは別に、そんな目でメラニー・ロランとレナ・オリンを対比してみるのも面白いのでは？

## ■ラストシーンの「美学な幕切れ」ぶりは？■

『キネマ旬報』10月上旬号で本作に星4つをつけた平田裕介氏は本作について、「旅情、叙情、慕情に激情が詰まっている」と実にうまい表現をしている。旅情と叙情は『リスボンへの夜行列車』という原題から十分想像できることは前述のとおり。そして、激情は、エステファニアをめぐるアマデウとジョルジェとの抗争(?)だが、さて慕情とは？

それはリスボンという旅先での自転車事故で眼鏡が割れたことによって偶然知り合った、女医マリアナとライムントとの感情だ。当初は伯父のジョアンを紹介してもらっただけの関係だったライムントとマリアナの2人が急速に「接近」するのは、ライムントがマリアナを食事に誘った時。2人が美しい夜景を眺めながら食事した場所は、「サラザール大橋」のたもととの倉庫街をレストランやバーに改装したリバーフロントエリアらしい。そこでライムントの話が次々と弾んだのは、美しい景色のせいばかりではなかったようだ。マリアナが聞き上手と言えればたしかにそうだが、それまで本の話題だけだったライムントの話題が、ここでは結婚生活の失敗談という本来誰にも触れられたくない話題まで自分からしゃべっていったからビックリ。ライムントは別れた妻から「退屈だ」と言われたそうだが、こんな風にイキイキとしゃべっているライムントを見れば、マリアナでなくとも素敵で知的な初老のおじさんと思うのは当然だ。

生きていたエステファニアとの「ご対面」を果たすことによって、アマデウの『言葉の金細工師』という本のすべてを知り得たライムントのリスボンでの旅はすべて終わったから、あとはスイスのベルンに戻り、復職するだけ。もちろん、校長はライムントの常識はずれの身勝手な行動に「怒り心頭」だから、復職できるかどうかは不明だが、ここでの本当の問題は、ライムントにはスイスに戻るしか道はないの？ということだ。

今、リスボンの駅でライムントを見送るのはマリアナ。駅や列車は映画のラストシーンに最もふさわしいものだから、そのままライムントが列車に乗り込み、少しずつ動き始める列車を見送るマリアナ。そんな構図でもそれなりのラストシーンにはなるが、さて本作のラストシーンは？それは、構図上だけではなく、ストーリー構成の面からも「美学な幕切れ」度の高いラストシーンになる。そんなラストシーンはあなたの目でしっかり確認しながら、その醍醐味をしっかりと味わいたい。